
Angel Beats original story

Tyke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A n g e l B e a t s o r i g i n a l s t o r y

【Nコード】

N 2 2 6 5 S

【作者名】

T y k e

【あらすじ】

A n g e l B e a t s ! に2人のオリキャラが加わる！

果たして、2人は戦線メンバーと無事にこの世界から卒業できるのか？

かなりの駄文、亀更新の可能性大ですが、精一杯がんばって完結を目指します。

皆さん、ぜひ読んでください。

Episode・01（前書き）

最初はかなり短いです。

では、どうぞ。

Episode・01

クソ… あっけねえな…

せっかく、俺みたいな奴でも「目標」を掴んだっていうのに…

これで、おしまいなのか…

「ん？」

なんで、俺は地面で寝てんだ？

？「起きたか？」

近くに人がいるのか？

俺はゆっくりと体を起こす。

すると、右側に男が立っていた。

？「新入りか？」

「アンタ、誰だ？」

？「俺か？霧島 和樹っていうんだ。いきなりで悪いが、お前、この状況理解できているか？」

「俺は死んだかと思ってるんだが…」

？「一応わかってるな。 そのとおり、ここは死後の世界だ。と
ここで、キミの名前は？」

「村上 勇次だ。」

和「勇次、早速で悪いんだが、入隊してくれないか？」

Episode・01（後書き）

いやゝ、始めちゃいました。（笑）

次はオリキャラ紹介なので、お願いします。

オリキャラ紹介（前書き）

ここでは、2人のキャラを紹介します。

和「オリキャラ紹介って、書いてるけど死因書いてねえじゃん。」

作「それは、エピソードの中で、お前らに喋ってもらっ。」

勇「めんどうだな。」

作「それでは、どうぞ。」

オリキャラ紹介

霧島 和樹

死んだ世界戦線の副リーダーで、結成当時から死後の世界にいる。

基本はツッコミ役だが、ノリが良い為、ボケもする。

勇次を常に気にかけている。

生前は高レベルの高校に通っており、かなりの秀才

容姿はそれなりに高く、NPCからラブレターをもらったりするが、本人は無自覚。

武器は主にサブマシンガン。たまに、ナイフも扱う。

戦闘力も高め完璧人間っぽいが、唯一の弱点は時間に少々ルーズなこと。

村上 勇次

音無の少し前に死後の世界に來た。

生前は不良であり、ケンカが強い。

1人で行動することが、多くぶっきらぼうな性格。

生前は学校に通ってはいたが、授業をあまり受けてない。

しかし、判断力や、洞察力などは高い。

バンドを組んでいて、ギターを弾いていた。

そのため、ガルドメンバーと居ることも多い。

酒、タバコを多く消費するため、一人でギルドに行ってはチャータ
ちと晩酌をしたりしている。

武器は主に日本刀。
使わない。

ハンドガンも持っているが、あまり

オリキャラ紹介（後書き）

のちのち、オリキャラに関しては設定を多少変えるかも知れません。

Episode・02（前書き）

勇「てめえ、1話1話が短いんだよ!!」

作「ごめん、それはしょうがない（　　）」

和「本当に短くてすいません。作者がアホでこのサイトを上手く使いこなせないのが原因です。」

作「和樹、冷静に解説しないでくれない?というかアホ呼ばわりするな!!」

勇「こんなグダグダで悪いけど、まあ読んでってくれ。」

Episode・02

勇「入隊？」

和「そうだ。俺達死んだ世界戦線はある敵、通称天使と呼ばれる奴と戦ってるんだが、入ってもらえないかな？」

勇「天使って、どんな奴「あなたたち、何をしているの？」

勇次と和樹は後ろを振り向くと、小柄な少女が立っていた。

和「言った矢先に出てくるとわ、嬉しいね。勇次、こいつが俺らの敵だ。」

勇「こいつが！？ どう考えても敵じゃねえだろ？」

天「最終下校時間は過ぎているのに、なんで外にいるの？」

和「悪いね。ちょっと野暮用があんだよ。」

天「そう。早く寮に帰る気はないのね？ ガードスキルhand
sonic」

そう言うつと、天使はいきなり出したsonicを和樹に突いてきた。

和「甘いな。俺も持つてるよ。」

和樹は簡単にナイフで天使の攻撃をはじく。

和「勇次、早く逃げるぞ！！」

そう言うつて、校舎に逃げる和樹。

しかし、いきなりの戦闘で混乱を起こしてる勇次は動かない。

グサッ

あっけなく、天使に胸を刺された勇次。

勇（なんでまた死なねえといけないんだよ…）

その場で倒れた勇次。

天使はガードスキルを解除し、女子寮に帰っていった。

和「あちやゝ、いきなり過ぎて理解できなかったか。
しょうがねえ、保健室に運ぶか。また目が覚めたら、
勧誘するか。」

遠くから見ていた和樹はそう呟いたとか

Episode・02（後書き）

本当に短くなるのわ、申し訳なく思ってます。

徐々に長くしていこうかなと思います。

Episode・03（前書き）

作「まだまだ、オリジナルで進みます。」

勇「別にいいけど、もうちょっと長くできねえの?」

作「俺にはこれが限界」

和・勇「……」

Episode・03

勇「ん…」

勇次は目が覚め、体を起こすと、ある異変に気付く。

勇「なんで、キズがないんだ？」

そう、勇次は昨夜に天使に胸を刺されたのだが、キズ痕一つも残っていないかった。

そして、勇次は保健室を退室する。

勇「とりあえず、屋上にでも行くか。」

屋上で学校を見渡す勇次。

すると、ギターの音色が聴こえてきた。

勇「アコースティックギターだな。でも、どこからだ？」

勇次は気になったので、屋上から音が聞こえた校舎に戻っていく。

）
）

勇「このあたりの気がすんだが…」

ギターの音色を聞きつけた勇次だが、場所が分からないらしい。

和「だから、くしたほうがいいって。」

？「和樹さん、それだとうちらも厳しいんですよ……」

勇「ここかな。」

とりあえず、聞き覚えのある声だったのでその空き教室に入る勇次。

ガラッ

「「「!?!?」」」

和「お、勇次ようやく起きたかあ。わざわざ来てくれて助かったよ。」

勇「いきなりで悪いが、この世界はどうなってんだ？俺はあいつに刺されたのに、なぜ死んでねえんだよ？」

和「この世界は死なない。それは分かったろ。しかし、死ぬ程の痛みは伴うと。」

勇「ふざけんなよ？そんなふざけた世界があつてたまるか！！」

和「んな事言つてもしょうがねえだろ。現実を受け止める。」

？「和樹さん、この人は？」

話に割ってくる紫色の髪をした少女。

和「こいつは新しくこの世界に来た奴だよ。村上勇次って言っんだ。」

勇「んで、こいつらは昨日言ってた戦線の奴らか？」

和「そのとおり、こいつらは戦線の陽動部隊のGirls Dead Monsterだ。」

勇「Girls Dead Monster?」

和「まあ、戦闘部隊とは違ってこいつらはバンドであるけどな。結構、人気あるんだぞ。」

勇「だから、ギターの音が聞こえたのか。」

和「メンバーも紹介しとこう。ギター担当のひさに、ベース担当の関根、ドラム担当の入江、そして、リーダーでボーカルの岩沢だ。」

それぞれを紹介する和樹。

それぞれにあいさつを済ませた、勇次は再び質問をする。

勇「思ったんだが、なんで制服が違っただ？全員死んだ奴じゃねえのか？」

和「それはだな「グウ」」どうした、関根？」

関「えへへ、お腹がちよつとね……」

和「ちょうど、昼時か。しょうがない。勇次、飯を食いながら、この世界についてを話そう。みんなも今日はおごるから一緒にどうだ？」

岩「なら、お言葉に甘えて。」

食堂

6人それぞれが、食べ始めた事でこの世界の事を話す、和樹。

勇「つまり、NPCと、死んだ人間、天使、そして、神がいて、その神にお前らは抗おうとしてるってことか。」

和「そうなるね。で、勇次。お前は入隊してくれるか？」

勇「別に、神に抗おうとゆうのは賛成だが、縛られた感じでなんかやだな。」

岩「確かに、私もそう思ったけど、今は、ひさ子達とバンドをやって楽しく過ごせている。この和樹だってかなり自由に過ごしているぞ。」

岩沢がそう言うと、和樹はある提案をする。

和「とりあえず、うちのリーダーに会ってみないか？俺よりよっぽど、頼りになる。」

勇「そうだな。一度、そいつに会ってみたいしな。紹介してもらおうか。」

岩「私もゆりにちょっと話があるから、一緒に行くよ。」

Episode・04（前書き）

ゆ「やっと、私たちの出番ね。」

作「そういえばさ、昨日Angel Beats!の漫画読んだけど。」

ゆ「私の可愛さに気づいちゃった?」（照）

作「改めて、ゆりっぺはバイオレンスな性格だと分かった。」

ゆ「あなたも一回死になさい!!」

作「わあゝ、銃を撃ちながらこっちに来た!!」

ゆ「待ちなさいよ!!」

ダダダッ

和「……。とりあえず、episode 4をゆづり。」

Episode・04

作戦本部（校長室）に向かう途中、勇次は岩沢と談話をしていた。

勇「そのリーダーはどんな奴なんだよ？」

岩「まあ、一言で言うなら男勝りで、負けん気の強い女の子って感じかな？」

和「会ってみれば分かるよ。ここの校長室が、死んだ世界戦線の作戦本部だからな。あと、合い言葉がないと、トラップが発動するから気をつけるよ。」

和樹が「神も仏も天使もなし」と言って、扉を開ける。

和「おい、ゆり。新しいメンバー候補をつれ
へブッ
!？」

すると、和樹の眉間に靴が当たる。

ゆ「和樹くん？あなた、また朝のミーティングサボったわね？」

和「違うって、朝はどうしても弱くて「パン！！」……。」「

ゆりを見ると右手にはハンドガンがあり、和樹の頭上には弾痕が

ゆ「何か言いたいことは？」

ゆりが、満面の笑みを向けながら和樹に問うと、

和「イエ、ナンデモアリマセン……」

言い訳も言う雰囲気ではなくなった。

勇「なんか、岩沢が言ったこと、分かった気がしたわ。」

ゆ「で、その新人候補くんは？」

和樹が平謝りして機嫌が戻ったところで、勇次を紹介する。

ゆ「ちなみに、どれくらいのことは話したの？」

和「とりあえず、天使、死なないこと、NPCまでは話した。」

ゆ「まあまあね。初めまして、勇次くん。私が、この戦線のリーダーをやってるゆりよ。よろしくね。」

そう言って、右手を差し出すゆり。

勇「よろしくな。とりあえず、この戦線の目的はなんなんだ？」

ゆ「ある程度聞いたなら分かるでしょうが、最終目的はこの世界を手に入れることよ。」

勇「なるほどね。それは面白そうだから、俺も入れさせてもらおうかな。改めてよろしく頼むよ。」

ゆ「じゃあ、主要なメンバーを紹介しておくわ。」

そう言うと、ゆりはその場にいた日向、大山、藤巻、松下、高松、椎名、TKを紹介する。

ゆ「あれ、野田君は？」

バンッ！！

扉を見ると、ハルバードを肩に担いでいる少年が立っていた。

？「ゆりっぺ！新しい奴が入ったって、本当か！？」

ゆ「ええ。私の前にいるのが、新しく入った村上勇次君よ。勇次君、このバカっぽい人が野田君よ。」

野「貴様が新入りか？ヒョロそうな奴だなあ。」

それを聞いて勇次は、カチンと頭に來たらしい。

勇「そういうのは、相手の実力を見てからにしてほしいね。とにかく、ゆりが言ったとおりにお前がバカというのは確認できたよ。」

勇次が、やれやれといった感じで言つと野田はかなりキレた。

野「貴様、俺に挑発するとは良い度胸だな！！そこまで言つなら、俺と勝負しろ！！」

勇「まあ、いいだろ。俺も久々にイライラしてるからな。気分転換させてもらおうかな。」

既に、勇次と野田の一発触発状態にオロオロしだした大山がゆりに話しかける。

大「ゆりっぺ、いいの！？いきなり、ケンカしてるけど？」

すると、ゆりはあっけらかんと、

ゆ「別にいいんじゃない？それに勇次君の戦闘力も分かるいい機会じゃない」

和「そうだな。勇次の武器とかも考えれるしな。ただ、ここじゃないんだから、屋上にでもいこう。」

そうして、ゆり達のメンバーも屋上に移動する。

【屋上】

2人が準備している間にゆりがあることを気付く。

ゆ「ちょっと待って。勇次君、あなた武器がなかったわね。」

和「まあ、野田がハルバードだからな。藤巻、お前の武器を勇次に貸してやれ。」

そう言って、藤巻が勇次に長ドスを貸そうとするが

勇「いや、素手でやる。」

と、言い出した。

ゆ「ちょっと、相手の野田君はこの戦線でも、かなりの戦闘力なのよ。それでも、平気なの!？」

勇「大丈夫だよ。それより、和樹。」

ゆりの忠告をやりわりと断って、和樹に話しかける。

和「ん、どうした?」

勇「この世界じゃ、死なないんだよね？」

和「ああ、死ぬ痛みは伴うが、大丈夫だ。」

勇「じゃあ、最悪人殺しみたいになっても問題ないな。」

和「ああ、だから思いっきりやれ。」

ゆ「そろそろ、準備はいいかしら？」

お互いが頷くと、ゆりは合図を出す。

ゆ「それじゃ、スタート!!」

そついうと、同時に2人は間合いを詰め、野田がハルバードを振りかぶる。

野「死ねええ!!」

しかし、難なく勇次はそれを避けると、カウンターパンチを野田にお見舞いする。

その後も闘いは続いたが、圧倒的な力で勇次が野田を追い詰める。

勇「降参したら、どうだ？これ以上やってもムダだと思うぞ。」

そう言って、角に追い詰める勇次。

野「うるせえええ!!そう、簡単に負けてられるかよ!!」

最後に振りかざした野田だったが、勇次の拳が当たり踏ん張れず屋上から落ちていく。

ゆ「それまでよ、あなた相当強いよね。かなり戦力になりそうだね。日向君は後で野田君を回収して来てね。武器も近距離タイプのほうが良さそうね。」

戦線メンバーも勇次の力を見て、かなりびっくりしている。

藤「お前、相当やるな!!」

大「凄いね!!あの野田君を倒すなんて。」

T「Oh,you are superb boy!!」

高「やりますね。」

和「お疲れさん。あそこまで、野田に攻撃させなかったのは、お前が始めてだぜ。」

勇「それは嬉しいが、1人もあいつの心配してねえけど、良いのか？」

和「だから、死なないと分かってるから、落ち着いてるんだよ。大丈夫だよ。それにな、ゆりと一緒にいると、死ぬのが当たり前になるしな。」

ゆ「和樹君、あなたは次は眉間に穴が空くわよ。」

和「い、いやだなあ。軽い冗談だつて。」

ゆ「次からは気をつけなさいね。そういえば、岩沢さん。話すことがあったよね？」

ゆりは、和樹に忠告して岩沢に顔を向けながら話す。

岩「実は、ギターの弦のストックと、アンプが底をついたんだ。だから、ゆりに補充を頼みに来たんだ。」

高「ゆりっぺさん、弾薬もたくさんは残ってなく、近距離タイプの武器も現在はないので、一緒に補充したほうがよろしいかと。」

高松が、岩沢の話に付け足すと、ゆりはしばらく考えて勇次に顔を向ける。

ゆ「そうね、勇次君。あなたは明日ギルドに行って補充を要請してきてくれないかしら？」

勇「別にいいが、そのギルドっていうところを知らないんだが。」

ゆ「それは、大丈夫よ。副リーダーの和樹君も一緒に行かすから。」

それには、和樹が反論をする。

和「ちょっと待ってよ！？なんで、俺もあんな所に行かねえとならないの？」

すると、ゆりは和樹に歩み寄って

ゆ「あなた、最近ミーティングサボったり、遅刻したりしてるから、その罰よー!!」

と言って、和樹の頬をつねっている。

和「いひあい、いひあい!! わはったはら、へをはなひて!!」(痛い、痛い。分かったから手を離して。)

ゆ「時間も時間だし、今日はとりあえず解散にしましょう。勇次君、和樹君頼んだわよ。」

ゆりが、屋上から下りて行くとそろそろメンバーを下りて行く。

残ったのは、和樹、勇次、岩沢の3人になった。

岩「なんか済まないな。押しつけた感じになって。」

勇「別に気にすんな。どっちにしろ、武器を持ってこないと行けないからな。にしても、ゆりって、あそこまでだとは思わなかったな。」

和「まあ、これくらいは慣れたよ。それより、明日もあるし、今日はお前の入隊祝いでも、するか。岩沢、ガルデモメンバーも一緒にどうだ。食券ならまだたくさんあるからまたおごるぜ。」

岩「じゃあ、先に行つて。みんな、呼んでくるから。」

勇「なんか、悪いな。」

和「いいよ、これくらい。それよりもこれからよろしくな。」

2人は握手をすると、食堂へ向かう。

その後、合流したガルデメンバーと一緒に大いに盛り上がった。

Episode・04（後書き）

作「なんとか、逃げ切ったぜ…」

勇「なあ、いつになったらアニメの1話に入るんだよ。」

作「とりあえず、あと5話はオリジナルで進めますよ。」

和「とりあえずさ、俺の出番さ」見つけたわよ!! TYKE、おとなしく死になさい」「……。」

作「やべえ!! 和樹、また今度聞いてやるからそれまでな。」

ゆ「待ちなさいよ!!。」

勇「なんか、大変だな。作者も……。」

和「とゆうより、今の完璧に自爆じゃん…。」

Episode・05（前書き）

すいません…

前回の投稿から10日以上経ってしまいました。

これからもう少し早めに投稿していきたいです。

Episode・05

【校長室】

明朝、和樹と勇次は朝のミーティングのため、校長室でゆりから指令を受けていた。

ゆ「今回の単独ギルド降下作戦は、勇次君の武器、弾薬、そしてギターの弦などを調達してきてちょうだい。」

和「ちゃんと、トラップは解除してくれてんだろな？」

ゆ「当たり前じゃない。新人くんいきなり酷なことはさせないわよ。」

ゆりは、そう断言すると

和「なら、とつと早く終わらすか。勇次行くぞ。」

そう言って、校長室を後にする和樹と勇次。

勇「ギルドって、どこにあんだよ？」

和「ギルドは地下にあるんだ。そこで、戦闘隊とは別の部隊が、戦線の武器を作ってくれている。」

その後、和樹と勇次は体育館からギルドに向かうと、どんどん地下に潜っていく。

勇「なあ、あとどれだけ歩けばいいんだよ？」

かなり歩いたせいか、勇次には疲労を顔に浮かべている。

和「ほら、あそこにマンホールがあるだろ？あそこから入って、階段を下ればギルドに着くぞ。」

ついに、辿り着いた勇次は安堵の顔を浮かべるが

和「言つとくけど、帰りのほうがツライぞ。2人で弾薬などを運ばねえといけないんだから……」

勇「それを忘れてた…」

絶望に落とされる勇次。

しかし、和樹はそんなことにお構いなしに、マンホールに下りていく。

【ギルド】

ギルド班A「おい、和樹。遅かったな。」

和「わりい、ちょっと道草食ってた。それよりチャーは？」

A「チャーさんなら、最終調整とか言って、まだ工場にいるよ。」

それを聞いて和樹は、勇次を連れて工場に入る。

和「チャーさん。」

工場に入ると和樹は、1人の工員に声をかける。

チ「おゝ、和樹。今日は、お前が当番だったか。ん？そいつは？」

和「こいつは新しく入った村上勇次ですよ。勇次、こちらがこのリーダーのチャーさんだ。」

そう言つて勇次を紹介する和樹だが、勇次はチャーを見るなり様子が変わっていく。

勇「チャーさん！？なんで、あなたがこんなところにいるんですか！？」

和「え？チャーさん、勇次と知り合いなんですか？」

チ「ああ、生前の時にな。勇次と聞いたからまさかとは、思ったが
……
勇次、お前も未練残してこっちに来たのか
？」

しばらく、静寂になったが、勇次は

勇「……それはまた今度話します。今はいろいろあるので、落ち着かせてください。」

チ「そうか。分かった、また今度ここに来い。お前が話せるようになるまで待つてやる。」

和「そう言うことなら、また来ないとな。勇次、今日は荷物も多いし、早く上がろう。」

勇「ああ。じゃあ、チャーさんまた必ず来ます。」

しばらく、ギルドで勇次の武器の調整や、補充をした後地上に向かう2人。

和「なあ。」

和樹が、リアカーを押しながら勇次に質問をする。

和「お前はなんでここに来た？それに、チャーさんにも話さなくてよかったのか？」

勇「ああ、もう少し自分で折り合いがついてからみんなに話すよ。」

和「そっか……。なら、そんなときにじっくり聞かせてもらおうよ。」

そう言うと、2人は会話のないまま、地上に戻る。

【校長室】

ガ
チ
ャ

和「今、戻った。」

ゆ「遅かったわね。待ちくたびれたわ。」

和「そう言っなって。2人で大変だったんだぞ…」

ゆ「勇次君もお疲れ様。いきなり、悪かったわね。」

勇「まあ、いいよ。とりあえず、ガルデモメンバーに弦とか持っていていいか?」

ゆ「それじゃあ、頼むわね。和樹君はちょっと残ってて。」

勇次が、校長室を出るとゆりはゆっくりと和樹に問いかける。

ゆ「どんな感じ？勇次君は結構良さそうだけど。」

和「どうかな。まだ、過去の事は話してくれなかったし、まだ少し距離感があるかな…。」

日「でも、まだ戦線入って2日目だぜ？そんなもんだろ？」

日向は和樹に疑問をあげるが、

和「というより、あまり信用してない感じだった。」

ゆ「もしかしたら、過去が絡んでるのかもしれないわね。和樹君、
ゆっくりでいいから勇次君と私達の距離を近づけるようにできない
かしら？」

和「まあ、なんとかしてみるよ。」

こうして、勇次が戦線に入って最初のオペレーションは無事に終了したのであった。

Episode・06（前書き）

和「また、投稿するのに時間かったな…。」

作「これからは1話を短くして投稿期間も短くしてみるよ。」

勇「作者は感想が欲しいようだ。書いてもいいよという人は書いてやってくれ。」

Episode・06

和樹と勇次が、ギルドに行ってからの数日後

勇次達、戦闘班メンバーは校長室に集められていた。

和「全員揃ったか？じゃあ、やり始めよう。」

ゆ「今日は新しい作戦を実行するわよ！！」

一同にどよめきが走る。

日「で、どんな作戦だ？」

和「まあ、今回は天使を殲滅できるかもしれないからな。勇次、カーテンを閉めてくれ。」

勇次がカーテンを閉め部屋を暗くなると、降りてきたスクリーンに作戦名が映し出される。

ゆ「今回は、オペレーションマインヘルを行うわ!!」

日「マインヘル？なんだそりゃ？」

高「マインは私にという意味がありますが。」

和「そっちのマインではねえな。直訳すると地雷地獄だ!」

ゆ「そう。今回はギルド特製の新兵器の地雷を使用するわ。天使にはその名の通りに地獄を見てもらいましょう」

恐ろしいことは微笑みながら言うゆりにメンバーは全員顔を惹きつけられた。

ゆ「作戦はこうよ。まず、校庭に地雷原を設け、そこに日向君、大山君、高松君が天使を導いてちょうだい。和樹君が、起爆装置のスイッチを押して、野田君、藤巻君、勇次君が爆発が収まったら天使に突撃してね。」

野「ああ。」

藤「了解だぜ！」

大「天使って、どうやって誘導するの？」

ゆ「それはあなたが考えてちょうだい。そこまで、手が回らないわ。」

日「それはひでえぜ！！ゆりっぺ！」

あまりの待遇に日向は叫ぶが、ゆりは無視する。

ゆ「作戦は、20:00から始めるわ。それまでに、地雷を校庭に埋設するわよ！！それではオペレーションスタート！！！」

【ガルデモ練習場所】

関「そつかあ、ゆりっぺさん、新しい作戦たてたんだ。」

勇「ああ、全くムチャな作戦だと思うんだがな…。」

勇次はミーティングが終わるとその足でガルデモメンバーに会いに来ていた。

岩「まあ、いつものことだしね。それより私達はどうすんだ?」

作戦の内容よりもライブがしたくてウズウズして勇次に聞く岩沢。

勇「今回はなしだと、言ってたな。俺はライブ見たことないから分かんねえけど、すげえ人気なんだってな?」

今回はライブがないと聞き少し落ち込む岩沢を尻目に関根とが答える。

関「まあね、みんなNPCだけど私達のライブは結構見にくてるよ。」

入「この前も岩沢さんは、ファンレターもらったたしね。」

関「でも、ひさ子さんはまだ一回もファンレターもらった事がない
へブッ!？」

ひ「話を作り替えるな!！」

話を勝手に変えた為にひさ子にゲンコツをくらう関根。

勇「まあ、楽しそうなのは分かったよ…。」

苦笑しながら勇次は言う。

しかし、既に別のことを考えているような顔をしている。

ひ「ん？勇次、どうしたんだ？」

勇「いやな、ちょっとイヤな予感がな…。」

入「今回の作戦がですか？」

勇「ああ、なんか誰かが酷い目にあいそうな気がするんだ。」

岩「まあ、ゆりに誰かが犠牲になるんじゃないかな？そう言うことはいつもあるから気にするなよ。」

勇「そうだと、いいんだが…。」

勇次は、頷きながら岩沢の言葉を信じようとしたが、頭の奥に引っかかるような感じが残っていた。

そして、勇次が思った予感は的中することになる。

Episode・06（後書き）

和「なんで、こんなに遅くなるんだよ？」

作「いやあ、最近ボーダーブレイクって、ゲームにハマってて。」

勇「……。今年、大学受験じゃねえのか？」

作「多分、大丈夫っしょ。」

和・勇「……………」

Episode・07（前書き）

作「この度は1ヶ月も放置してすみません。m（―）（―）m」

勇「これを読んでくれる方はいんのかよ。」

Episode・07

19:55【校庭】

無事に地雷を敷設して、待機中の戦線メンバー。

勇次は未だに心の奥に違和感が残っている。

勇（どんどん、イヤな予感が大きくなってきた気がする。無事に作戦が終わればいいんだが…。）

そんなことを思っている間に、日向達の天使誘導の班女子寮付近で待機している。

和「そろそろ時間だけど、ちゃんと天使は来るかな？」

ゆ「誘導部隊がちゃんとしていれば、問題ないわ。ただ、日向君たちだからね…。」

ゆりは誘導部隊の人選に不安があるらしく、少し齒切れの悪い言い方をする。

勇「お前が選んだんだろ…。」

それを見逃さずにつっこむ勇次

ダダダッ!!

和「来たみたいだぜ。」

日「来たぞー!!」

女子寮付近で誘導の役目を受けていた日向達が走って来る。

ゆ「和樹君、準備して置いて。総員、戦闘準備用意！」

それを見て、ゆりは総員に戦闘準備を促す。

天使は、ゆっくりと近づいて来ている。

和樹はすでに地雷の起爆装置に手をかけしており、勇次、野田、藤巻の3人もいつでも飛び出せる準備を整えている。

そして

ゆ「起爆開始!!」

ゆりの合図により、ボタンを押す和樹。

バアアアン!!!!!!

見事に地雷が起爆し、天使が爆発に巻き込まれる。

ゆ「野田君たち、炎が収まったら行くわよ。」

現在、天使は炎に包まれており、容易に近づくことができない。

あと少しで、天使を追い詰める。

ほとんどの戦線メンバーが思った、その時。

和「ハア…、ハア…、」

ゆ「和樹君？」

突然、頭を抱え苦しんでいる和樹。

ゆりもこれには驚きを隠せないでいる。

和「う、うわあああああああああああああ
ああああああ！」

いきなり叫んだかと思うと、そのままその場に倒れてしまった和樹。

ゆ「和樹君？和樹君！！」

ゆりが和樹の体を揺さぶるが、起きる気配が全くない。

曰「ゆりっぺ、一体和樹はどうしたんだ!？」

ゆ「分らないわ、とりあえず引き上げるわよ！！野田君たち、天使に足止めをくらわせて！！」

和樹が倒れたこれにより、事実上の作戦中止を告げるゆりは待機中

の野田たちに命令を下した。

そして、松下が和樹を背負い戦線メンバーは野田たちを残して離脱していった。

Episode・08（前書き）

作「最近、亀更新で本当にすいませんm（＿）m」

和「しかも短い!!」

勇「お前、今年受験じゃねえのか？」

作「年内の完成はムリだけど必ず完結させる!」

和「まあ、皆さん長い目で見てやってください。」

Episode・08

【保健室】

なんとか、天使の追撃を振り切った戦線メンバーは倒れた和樹を寝かせて、和樹が倒れた原因を話し合っている。

ゆ「今日は和樹君、調子が悪かったのかしら？」

日「そんな訳がねえ。オペレーションまでは普通だったんだぞ。」

あれやこれやと述べているなか、勇次は1つの推測を出す。

勇「なんか、生前にトラウマになることがあったから倒れたんじゃないのか？」

ゆ「根拠は？」

勇「いや、これと言ったことはないが、もしかしてなと思って。」

高「そういえば、私たちは和樹さんの生前の記憶を聞いておりませんね。」

大「ねえ、ゆりっぺ。和樹君の生前に何があったのか知ってるんですよ？」

大山がゆりに問いかけると、ゆりはひとつ考えてから日向を見る。

ゆ「…確かに私、日向君、が和樹君と付き合いが一番長いけど、私たちも和樹君がここに來た理由は知らないの…。」

全「!？」

ゆりが、そう言つと戦線メンバーには驚きを隠せない。

日「もちろん、俺らも和樹から何回も聞こうとした。しかし、いつもはぐらかされたんだ。」

日向がそう言つと沈黙が流れる。

そして、その流れを断ち切るようにゆりが口を開く。

ゆ「しばらくは様子を見るしかないわね。一旦解散しましょ。和樹君が起きたらまた集合をかけるから。」

ゆり以外は保健室を出ていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2265s/>

Angel Beats original story

2011年9月5日12時44分発行